



2024(令和6)年1月25日発行

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課) 住所/〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-15 TEL / 06-6879-5111(代表)

QRコードから本院ホームページをご覧ください

https://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載(この紙面は再生紙を使っています)

プレコン 妊娠前 外来を開設

安心して妊娠・出産を迎えるために



木村正教授と岡田愛子助教

本院産科・婦人科は2023年7月、妊娠前の女性やカップルを対象にした「プレコン外来」を開設しました。将来、安心して妊娠・出産を迎えられ、出産後も健康的な生活を送ることができるよう、最新の知見を有した臨床医がカウンセリングに応じています。

プレコンは、受胎前の健康管理を意味する「プレコンセプションケア」の略です。女性やカップルが妊娠・出産の機会をより前向きに捉えられるような環境づくりを目的に、WHO(世界保健機関)が2013年に提唱しました。日本でも2015年に東京の医療機関が初めて開設して以降、予防的医療の一環として各地で徐々に増えています。

本来は将来的に妊娠・出産を希望するすべての女性やカップルを対象にしていますが、何らかの疾患で通院中の患者さんや、先天性や遺伝性疾患がある患者さんを対象としてまずは始めました。治療中の疾患が妊娠・出産に影響しないか、逆に妊娠が疾病に影響しないか、などの不安や悩みについて、専門医が話を聴いたうえで情報提供します。妊娠前や妊娠中の健康管理などについても助言します。

で、産科・婦人科長の木村正教授の方針のもと、診療科内での診療体制を整えるとともに他の診療科の窓口となる外来の開設を決めました。現在、奇数週の木曜日午後、完全予約制で1時間に1組を受け付けています。費用は自費診療で1時間1万1000円(税込込み)。産科・婦人科の

岡田愛子助教が主に外来を担当しています。これまでの相談は、自己免疫疾患で通院中の患者さんらから「妊娠したらどのようなことに気をつけたいか」といふ問い合わせが多く、影響はありませぬか」などの内容が多いといわれています。岡田助教は「相談者さんが妊娠・出産について正しく理解し、安心して生活を送れるようにサポートしたい。できればカップルで利用してほしい」と話します。

今後は相談者さんにアンケートをとるなどして、よりよいカウンセリングにつなげます。現在は本院の他診療科から紹介された相談者さんが主ですが、将来的には他院からの紹介にも対応できるように、ネットワークを広げていく方針です。

問い合わせ先

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2 臨床研究棟3階 大阪大学大学院医学系研究科 産科学婦人科学教室 TEL 06-6879-3351

マスク着用をお願い

私たちの隣に、とても感染症に弱い方がおられます。マスクの着用をお願いいたします。この病院には、病気が治療により免疫力が落ちた方がたくさんおられます。待合室でのあなたの隣の、向かいの患者さんがそうかもしれません。少しでも正しいマスク着用によりウイルス拡散の可能性を下げてくださいますようお願いいたします。



病院再開発基金へのご寄附のお願い

本院は、良質な医療を提供するとともに、医療人の育成と医療の発展に貢献するという使命を果たすべく、令和7年春の運用開始を目指し病院再開発事業を行っています。本事業には大学病院でしかできない臨床医学研究・開発など将来の医療に必要な部門の整備も含まれています。診療機能・未来への医学の研究開発機能のさらなる充実を図るため、今般、「大阪大学医学部附属病院再開発基金」を、大阪大学未来基金に立ち上げました。再開発のコンセプトは、「Futurability待ち遠しくなる未来へ。」です。何卒、本事業の趣旨にご賛同いただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

大阪大学 未来基金 詳細はこちらをご覧ください



診療サービス充実に向け 救命救急科、集中治療科を新設

新型コロナウイルス感染症の感染拡大や大規模災害の多発などにより、急性重症患者に対応する医療体制への社会的要請が高まっています。そのような中、本院は2024年1月、救命救急科と集中治療科を新設しました。急性重症患者については、これまで高度救命救急センターや集中治療部が対応してきましたが、独立した診療科とすることで院内での位置付けを明確にし、両科間および他診療科との連携をさらに深めることにより診療サービスの充実を図ります。

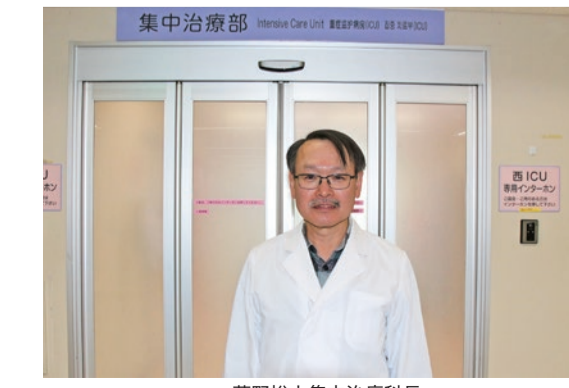


ドクターヘリの前に立つ織田順救命救急科長

1967年に日本初の重症救急専門施設として開設された「特殊救急部」からはじまった高度救命救急センターでは、三次救急医療施設として、救急隊が現場から搬送したり、他の医療機関から紹介された

りした生命に関わる重症患者のみ受け入れています。外傷や熱傷、敗血症、産科救急などで年間に1600〜1700人が搬送されます。しかし、診療科ではなかったことにより、患者さんやご家族側には何科の医師に診てもらっていいかわかりにくい状況でした。この度、診療科となったことにより、救命救急科の医師が「主治医」として治療に当たることができ、患者さんにより安心感を持って治療を受けていただけるようになりました。救命救急科は医師20人、救急治療科は医師20人、救急治療に当たります。

一方、集中治療部は1974年に開設され、現在30床が稼働しています。本院で大きな手術を受けたり、肺炎などで呼吸不全に陥ったりした患者さんが入室します。心臓血管外科などの手術や移植手術後の患者さんなど、全身管理が必要な患者さんを受け入



藤野裕士集中治療科長

集中治療科は、コロナ禍で重症患者管理の重要性がクローズアップされ、社会的要請が高まったことを受け、厚生労働省が2022年に新たに診療科として認めました。本院の同科は麻酔科を中心に各科からの医師を含めて約20人が所属しています。これまでは何科の医師が働いているかわかりにくかったのですが、正式に医師自身が「集中治療科」と名乗ることができるようになりました。生涯にわたって専門とする診療領域ができたことから、現スタッフの定着率が高まりより安定的な診療体制を構築することができると考えています。

両科の開設にあたり「救急・集中治療部門」を新たに作り、これまで以上に密な連携を図っていく方針です。院内での位置付けが整理され、統計面での実績や専門医としての立場が一層明確になることにより、患者さんへのサービスの向上が期待されるとともに、他の診療科と並列の関係になることで、志を持つ若い医師にも説明しやすくなり、人材育成の効果が期待されています。

統合診療棟

運用開始まで残すところ1年半



北東側からの航空写真(写真は2023年11月末時点)

赤枠が工事エリアで、西側が4階床、東側が2階床。



2階床コンクリート



室内コンクリート壁

令和7年運用開始予定の「統合診療棟」の建設工事は、建物の骨組みとなる鉄骨柱の立ち上がりとともに、加速度的に外から見える風景が変わりつつあります。2023年2月頃から始まった建物躯体の鉄骨工事は、12月初め時点で、東側エリアは外来になる予定の2階床まで、西側エリアは手術室になる予定の4階床まで立ち上がっています。今年度中には最上階となる8階まで鉄骨が組みあがり、建物としての全体像が見えてくる予定です。

ロボット支援手術で成果

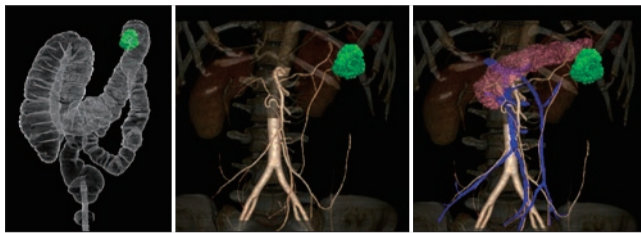
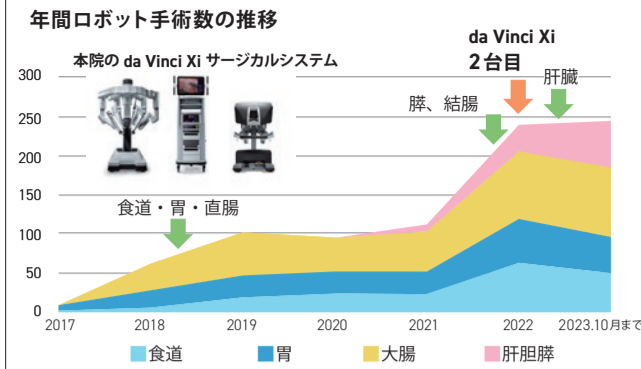
最後まで諦めない難治がん治療

消化器外科

近年、消化器がんに対するロボット支援手術の適応が広がり、急速に普及しています。本院消化器外科ではロボット支援手術の開発にも関わっていたため、保険適応となる前からロボット支援手術を多数行ってきましたが、2018年4月にロボット支援食道切

除、胃切除、直腸切除が保険収載され、2021年10月に脾切除、結腸切除、2022年4月に肝切除も保険診療で行えるようになり、年間ロボット支援手術数が急速に増加しています。

この手術では、多関節鉗子、手ブレ防止機能、鮮明な3D画像により、優れた空間認識を生かした繊細な手術が可能



術前の詳細診断 (PET-CTとダイナミック造影CT画像再構築による三次元仮想画像)

消化器外科は一般の市中病院では治療が困難な難治がんに対して、積極的な治療を行い、成果を上げています。今回は、その中でも特に難治性である脾臓がんと食道がんの治療について紹介します。

【脾臓がん】脾臓がんの患者さんは全国的に増加傾向にあります。本院では、比較的早期に見つかった脾臓がんに対してロボット手術をはじめとした低侵襲手術に取り組み、一方、切除不可な進行がんに対しては、抗がん剤や放射線治療によって切除できるようにする工夫もしています。本院の昨年1年

安全で良質な輸血を第一に 先端の細胞療法のサポートの役割も担う



輸血部

輸血は血液を臓器と考える最も頻繁に行われている臓器移植です。非常に安全な医

療ですが、一歩間違えると大きな医療過誤につながる可能性もあります。輸血部では「常に安全かつ良質な輸血」をモットーに、部長を含めた医

師3人、専従の臨床検査技師8人(他に育児中の1人)、看護師1人の計12人のスタッフが24時間体制で患者さんの命を支えています。近年、輸血関連の検査・管理業務に加え、CAR-T細胞療法での細胞採取、移植関連HLA検査など、先端医療をサポートするという大きな役割も担っています。

近年ますます大きくなった役割が細胞療法という先端的医療のサポート業務です。血液がんなどの治療で投与する造血幹細胞を血液から採取する末梢血幹細胞採取(年間20〜30件)、白血病や悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの最新療法であるCAR-T細胞療法で使う患者さん自身のリンパ球の採取(年間約20件)などです。本院の未来医療センターと連携して採取細胞の処理をスムーズにできるのも強みです。

また、難病である特発性血小板減少性紫斑病(ITP)や血小板機能異常症の研究も長年積極的に進めています。

間の脾臓がん手術のうち15%は従来ならば手術ができないとされていた患者さんでした。

【食道がん】食道がんは診断された時点で進行していることが多く、治療が難しいがんの一つとされています。ほ

れていますが、患者さんの希望にあわせて最後まであきらめない治療を提供しています。他院で手術できないとされた進行がんも免疫療法や放射線、抗がん剤を用いて切除が可能になる患者さんもいます。ほ

ぼ全ての患者さんにロボット支援手術や胸腔鏡・腹腔鏡手術といった体の負担の小さい手術を受けていただけており、術後も生活の質を落とすことのないように様々な工夫をしています。

者さんの血液との適合性を調べる交差適合検査などがあります。このうち交差適合検査に関しては、コンピュータクロスマッチという血液データをコンピュータが照合・確認する方法が普及し大幅な省力化が進んでいます。管理業務では、適正に温度管理した保冷庫での成分ごとの血液製剤の保管、血液製剤をできるだけ無駄なく利用し、廃棄率(2022年は0.17%)を最小限に抑える取り組みもしています。

★ PHOTO ミニ・ニュース TOPICS

12/19 **サンタ回診**

12/22 **クリスマスコンサート**

10/13 **秋のミニコンサート**

10/28 **みんなが笑顔になる花火大会**

10/30 **がんサロン 阪大病院見学会**

多田典史 事務部長

おすすめ御膳

お品書き 一般食

- ・ 菜飯
- ・ あじの竜田揚げ
- ・ きのこそば
- ・ おたうえ風
- ・ 林檎のタルト

お品書き 肝臓B食

- ・ なめしご飯
- ・ 鮭の竜田揚げ
- ・ お田うえ煮
- ・ 信州そば
- ・ のた餅風

健康寿命が全国トップである長野県、その要因の一つに野菜摂取量の多さが知られています。今回は、「野菜を多く使った長野県らしいメニューを」という多田典史事務部長の想いをおすすめ御膳にしました。多くの患者さんから「美味しかった。」というお声を頂いたほか、「長野に行ったことがないので新鮮でした。」「登山が趣味で長野に行っていたからその時のことも思い出した。」などのご感想も頂きました。今後も様々な観点から患者さんに楽しんで頂ける病院食作りに取り組んで参ります。

診療科長等ごあいさつ

新

● 老年・高血圧内科長
● 総合診療科長・総合診療部長

やまもと こういち
山本 浩一

このたび老年・高血圧内科長を拝命しました。老年内科では高齢者が有する特定の臓器に限定されない医学的問題に対して取り組んでいます。フレイル、認知症、ポリファーマシー、マルチモービディティ、老年症候群など高齢患者の予後やADLに及ぼす病態に対して多職種で解決し、病院全体の高齢者診療を向上させることを目指しています。また、高血圧内科では国内のオピニオンリーダーとして高血圧診療の最適化を行っていきます。

このたび総合診療科長を拝命しました。総合診療科は院内外から紹介される診断困難症例や多臓器にわたる病態に対して、原因究明し適切な治療に結び付ける役割を担っています。また、初期研修医の外来研修の場でもあり、学生や若手医師の教育にも力を入れています。総合診療科は各診療科との連携が不可欠です。ご協力のほどお願い申し上げます。(令和5年11月1日就任)

● 救急・集中治療部門長
● 集中治療科長

ふじの ゆうじ
藤野 裕士

新たに開設される救急・集中治療部門長および集中治療科長を拝命いたしました藤野裕士です。集中治療科の標榜が正式に認可されたことに伴い、救命救急科と共に救急・集中治療部門を大阪大学医学部附属病院に設置することになりました。COVID-19まん延時には両科が密接に協力し、250名を超える重症患者の受け入れと治療を行いつつ救急対応と院内重症患者治療を行ってきました。今後も救急・集中治療部門では内部で連携しつつ役割を果たしてまいります。よろしくお願ひ致します。(令和6年1月1日就任)

● 救命救急科長

おだ じゅん
織田 順

救命救急科長を拝命しました。救命救急科は高度救命救急センターに最緊急・最重症の患者さんの搬送を受け入れ、生命の安定化を図るとともに引き続きセンター内で集中治療を行います。また院外でも災害医療や病院前診療(ドクターヘリ・ドクターカー、DMAT出場)、地域の救急システムの構築や行政との連携の役割も果たしています。地域医療の最後の砦となる診療科として地域の安全安心に貢献するべく思いを新たにしています。(令和6年1月1日就任)